

Symposium

新教育への新しいアプローチの可能性

提案: 古屋恵太(東京学芸大学)
渡邊隆信(兵庫教育大学)
木内陽一(鳴門教育大学)
司会: 今井重孝(青山学院大学)

新教育については、『近代教育フォーラム』第3号(1994年8月)において、「新教育批判の諸相」という特集が組まれたことがある。そこで出された論点を更に越えた新しいアプローチの可能性を探るのが、今回のシンポジウムの目指すところである。

19世紀後半に国民教育制度が確立した後、いわば世界同時現象として現出した新教育運動は、現在の様々な教育改革に対しても直接的、間接的に大きな影響を与えており、この歴史的運動をどう評価し、その光と影をどう彩り、その限界をどう乗り越え、21世紀における新たな教育改革を導く新しい思想へとつなげていくかは、とりわけ、新自由主義による教育改革が世界を席卷しつつある現在、緊急の課題であると見られる。世界的な視野を維持しつつ、日本とアメリカとヨーロッパにおける微妙で重要な違いにも注目しながら、新教育運動の21世紀における意味を明らかにできるような問題提起とディスカッションが、期待される。

History
of
Educational
Thought
Society

2004.9.18(土), 19(日)
日本大学文理学部百周年記念館

教育思想史学会 第14回大会
プログラム

交通案内
日本大学文理学部百周年記念館
〒156-8550 東京都世田谷区桜上水4-2-50
京王線・東急世田谷線「下高井戸」下車
徒歩10分

参加費
〔会員〕
一般=2,000円 学生・非常勤=1,000円

〔非会員〕
一般=2,500円 学生・非常勤=1,500円

懇親会費
〔会員・非会員ともに〕
一般=5,000円 学生・非常勤=3,000円

年会費
一般=5,000円 学生・非常勤=3,000円

事務局からのお知らせ
昼食の際は、下高井戸駅前から日本大学文理学部へ続く「日大通り」に、多くの飲食店が並んでいますので、ご利用ください。なお、二日目の昼食については、お弁当の予約販売もいたします。

教育思想史学会

History of Educational Thought Society

〒214-8565 神奈川県川崎市多摩区西生田1-1-1

日本女子大学人間社会学部教育学科内

TEL: 044-952-6873

URL: <http://wwwsoc.nii.ac.jp/hets/>

E-mail: hets@fc.jwu.ac.jp

タイムスケジュール

Forum 1

Forum 2

第1日：2004.9.18(土)

- 10:00-12:00 理事会・編集委員会
12:00- 受付(百周年記念館1Fロビー)
13:30-15:15 フォーラム1(国際会議場)
「歴史に非常ブレーキをかけるもの
歴史の天使が眼差す行方」
15:30-17:15 フォーラム2(国際会議場)
「表象の学習/生としての学び
学ぶことの二つの系譜」
17:30-18:15 総会
教育思想史学会奨励賞表彰式
(国際会議場)
18:30-20:00 懇親会(文理学部内食堂・チェリー)

第2日：2004.9.19(日)

- 9:30- 受付
10:00-11:45 コロキウム(会議室)
「他者論の行方 生命、メディア、
あるいは、不在の刻印」
「ドイツ観念論哲学の表と裏
(光と影)」
「スクールとしてのホーム
/ホームとしてのスクール」
13:30-17:30 シンポジウム(国際会議場)
「新教育への
新しいアプローチの可能性」

コロキウムの概要は別紙「コロキウム概要」をご覧ください

歴史に非常ブレーキをかけるもの 歴史の天使が眼差す行方

報告:池田全之(秋田大学)
司会:加藤守通(東北大学)

ドイツ観念論を現代哲学との関係で検討するよ
うにとの依頼を受けて、今回取り上げるのは、シェ
リングの『世界時代』(1811/15年)とベンヤミン
の『歴史の概念について』(1940年)である。さし
あたり、この二つに照応関係をみるのは難しいが、
それらは共通して、連続的な流れという通常の時間
観への異論を提示している。つまり、シェリングは
決断を焦点とする時間産出という思想を提起してお
り、ベンヤミンは、決然として過去志向に方向転換
すること(「過去の引用」)を革命であるとする。だ
が、シェリングは後期哲学において『世界時代』の
立場を否定するようになり、ベンヤミンは、過去志
向の実質を「屑拾い」や「収集家」という思考像に
おいて画定していく。決断を機軸としたこうした二
人の時間観からはいかなる示唆が与えられるのか。
今回の報告では両者の思想の行方を見据えて、「時間
を生きることの尺度はどこにあるか」という観点か
らこの問題に答えてみたい。

表象の学習/生としての学び 学ぶことの二つの系譜

報告:松下良平(金沢大学)
司会:松浦良充(慶應義塾大学)

教育への批判によって学習への関心が高まり、旧
来の学習とそれを乗り越える学習の区別があちこち
で唱えられるようになった。だが、やがて後者の学
習の問題点も暴かれるようになり、迷走する議論の
向こう側では、教育が素知らぬ顔で傍若無人にふる
まう。すでに生じつつあるこの肉肉な逆説から、
どうすれば抜けだせるのだろうか。そのカギは、旧
来の学習論が無視・排除してきたものを救出するも
う一つの学習論ではなく、教育=学習論と原理的に
異なり、かつそこにある利点を考慮した包括的な学
習論を築くことにあると思われる。本発表では、旧
来の学習とその代替となる学習を、強制/自発、画
一/個性、一方的/相互的、といった図式によつて
ではなく、「表象の学習」と「生としての学び」とし
て区別する。近代に特有の「表象の学習」の喜劇的
にして悲劇的な末路を確認したうえで、「生としての
学び」の歴史的・社会的な多様性と一般性について
考えてみたい。